

知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成27年6月12日（金）

午後1時30分～3時30分

【会場】南伊豆役場 湯けむりホール

1 出席者

- ・ 発言者 南伊豆町・下田市において様々な分野で活躍されている方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 126人

2 発言意見

	項 目	頁
発言者1	ゆるキャラを活かしたまちづくりについて	3
2	下田市のマリンスポーツについて	5
3	福祉活動について	9
4	「ききがきや」の活動について	11
5	農業・食育活動について	15
6	若者の起業について	17
発言者2	今後のマリンスポーツについて	26
発言者1	子供の学力について	27
傍聴者1	アウトリガーカヌーについて	30
2	伊豆半島のジオパークについて	31
3	浜岡原発について	32

【川勝知事】

皆様、こんにちは。今日はこちらで南伊豆の町民の方々、また下田の市民の方々と直接お話をできる機会をいただきまして、大変ありがたく思っております。なるべく早くと思っておりましたが、ようやく実現できたという思いです。

今、移動知事室の途中です。移動知事室というのをやってから、もう2、3年になるんですけれども、私知事になってほぼ6年を終わろうとしていますけれども、こちらに来ると、伊豆半島には100回以上来ているんですけれども、やはり南伊豆の方に来るとなれば4時間近くかかりますし、こちらで皆様方とお話をして今度帰ると、やっぱりこれほとんど一日仕事になるんですね。

ですからそういうことよりも、何も知事の仕事は県庁舎の5階の知事室だけであるんじゃないということで、こちらに泊まってやろうということで、昨日から泊まっているんですが、今の知事室はこの賀茂振興局長の局長室が私の部屋になっておりまして、昨日の夜もこちらのリーダーの方たちと意見交換をし、今朝も8時過ぎからあちらこちらを回りまして、ついさっきは南上小学校、またそちらの近くに東京から移住されてきた方々とか、また子供たちと色々な話を聞いたり、みくらの里の特養を見学させていただいたり、下田の海洋研究所、これを見たり、そういう仕事をしてまいりました。

今日はこちらに参りましたらば、まずは「いろり男爵」殿に、男爵閣下に迎えていただきまして、昨日は実はペリー提督閣下が「ペりりん」くんというふうには、割と気楽に呼んでいるんですが、迎えていただきまして、大変楽しいところでございます。

そして、今日は私の意見を言うのではなくて、この南伊豆と下田のリーダーの方たちのお話をしっかり聞いて、そして必要なことがあれば即実行すると。

言われたことで、やりますと言ったことは、今すぐできること、あるいはやりますと持って帰って、そして必ずそれがどういう形で実行できるかを報告するということになっておりまして、単に聞き流すとか、とりあえず聞いておきましょうとかという、あるいは検討しますというそういうものではありません。ですからしっかりお聞きして、そして地元の人たちの役に立つと。

そしてこの地元のリーダーの先生方も今日は来ておられますので、そういう意味で2時間しっかり勉強させていただいて、この広聴会は聴く方ですね、広報ではなくて聴く方ですから、これが実りあるものになりますようお願いを申し上げまして御挨拶といたします。本日はどうぞよろしく願いをいたします。

【発言者1】

下田青年会議所青年部理事、発言者1と申します。本日はよろしく申し上げます。

まずその前に一人ちょっと呼んでいる者がおりますので、御紹介させていただきたいと
思います。「ぺるりん」。5月3日に下田の方で生まれました御当地キャラクターの「ぺる
りん」でございます。皆様、何とぞよろしく申し上げます。

昨日はペリーの格好で知事の方をお迎えしたんですけれども、本日はキンメの格好をし
て、下田の水揚げ量日本一ということで、今こちらにおられる下田市長も「きんめがど〜
ん」でキンメをPRしていただいています。それと一緒にPRをさせていただいています
ので、私の発言の間、ちょっと皆様の目の中に入ってしまうかもしれませんけれども、何
とぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは発言をさせていただきます。私この中で一人唯一専門家でも何でもございませ
ん。単なる普通の建設業を営んでいる人間で、商工会議所の青年部の理事をやっております
すが、この「ぺるりん」というものを売りに出したその中の一人ということで、今日発言
させていただいております。

実は皆様に今日短い時間の中でお話ししますのは、なぜ「ぺるりん」というキャラクタ
ーが生まれたのかということをお話しさせていただきたいと思ひます。私9年前下田に帰
ってきました。そのとき先輩に言われました。君は宿命的原住民であると。要は帰ってき
たい、帰ってきたくないじゃなく、もうこのまちで住まざるを得ない、要はこのまちで
どうやって生きていくか、それを考えていかざるを得ない人間なんだよ。じゃ君はどうす
るの。自分の幸せだけでいいの？周りも幸せになって、周りも豊かになって、君も豊かに
なるんじゃないか。

そのような教えの中から、私はそのとき下田青年会議所という団体があるんですが、こ
れは下田という名前がついておりますが、賀茂地区1市5町の団体でございます。この団
体、こちらに下田市長はじめ何人かの先輩の方々がおられます。実は皆様、南伊豆の町議
がおられますけれども、その当時、町議とも、実はそういった形で青年会議所の中で出会
い、今は町民の意見を政治の舞台にということで、今町議として活躍されておられます。

そのときに、どうしても、それで青年会議所というものをやっていたんですけれども、
そのほかいろんな団体に行くわけですよ。私はお祭りも昔からやっておりますし、また地
域のいろんな活動をやっております。ただ、どこの場所に行っても、同じ人が役名が変わ
っているだけなんです。

これは何も下田に限ったことではなく、日本全国であることなんです。例えば、今日2つ会議が午後にありますよ。第1回目の会議で、第2回目の会議で、部屋が変わっただけで、役職がみんな名札が変わっただけで、みんな同じメンバーなんですね。これは何ということなんだということで、これは実はすごい根深い問題があるということに後々気がつくわけです。

といいますのも、この地域を活性化しよう、そして経済的にも豊かになりましょう、暮らしやすいまちにしましょう。みんなが思っているはずなんです、そこに熱意を異常に込めてしまう人と、一般の方と、すごい温度のギャップが生まれてしまっており、ここのギャップが埋まらないもので、うまくみんなで活動しようというところまで行き着かないんじゃないか。そこがどうしても埋まらないギャップがあり、ここをどうしようか。そういった話をずっとしており、そこをどうやって縮めるか、これをみんなで試行錯誤しておりました。

その中の1つとして、先ほど町議を紹介させていただいたのは何かと申しますと、まず1つは政治の舞台、こういったところで住民の皆さんと政治とのクッションになろうというように目指す者もあらわれました。私の先輩、後輩、合わせて3名、そういった形で今、議員活動をされておられる。また下田市長におかれましては、本当に私の青年会議所の先輩として、そのような重大な役目についていただいております。

また、そのほかの方面でもいろんな方がおられたんですけれども、実は2012年、私下田の黒船祭の実行委員会におりまして、そこでゆるキャラ大集合という企画をしました。そのときにゆるキャラの効力にびっくりしました。女性、子供、こういった地域づくりというところに対してなかなか興味を持っていただけない方に、すごい注目してもらえる。ここに実は着目したのでした。

ただ最初、実はおもしろいからつくってみよう、自分たちが遊ぶためにつくってみよう、そういうふう考えたんですけれども、そのとき我々がゆるキャラつくろうと言っているのをここにおられます下田市長が偶然にも耳に入りまして、我々にアドバイスにくれました。1回勉強してみなさいと。どうせ後発なんだから、ゆるキャラって一体何なの、それを勉強してみなさいよと。

その一言のおかげで、今、ゆるキャラサミットという本当に日本でトップクラスで活躍されている羽生市という市の観光協会の方、観光課長さんのお話を聞いたり、またこの辺ですと、「あつおくん」ですとか、いろんなゆるキャラの運営されている方にいろいろ勉強

のために伺ってまいりました。そのときに、やっぱり実はここで一気に転換が起きました。

「ふなっしー」とか今すごい有名になっているああいうPRキャラクターがいるんですけども、実はあそこはゆるキャラの本来の立場じゃないと。

実はこのゆるキャラというのは、その市の偶像であったり、みんなが注目してくれる的であったりとか、要は下田市を、私で言えばこの「ぺるりん」というのは下田市をあらわす一つの象徴である。そういうものにして住民の皆さんに愛していただけたならば、そこでみんなが一致団結してくれたならば、そうすればこのまちの活性化、またひとつ違う方向に行くんじゃないか。そのような思いが生まれまして、じゃあそういう方向に行ってみよう。

ですので、この余りにもスタンダードです。余りにもかわいい、かわいい、かわいい、それでいいんです。かわいくて、何となく下田を訴える、青い海、青い空、青が入っていたり、ペリーがあったり、キンメがあったり、そうやって要は今まで地域の活性とか、下田市ということを意識してなかった皆さんに、あえて意識してもらおう。そのためのキャラクターとしてこのキャラクターを生まさせていただいた次第です。

ちょっとお話が長くなってきましたので、ここでまとめさせていただきますけれども、今後も私としましては、この「ぺるりん」を何も全国で有名にしようとか、そういう「ふなっしー」や「くまモン」みたいにしようなんていうことは一切思っておりません。ただただ下田のみんなに愛してもらい、また、ただただ伊豆半島のみんなに愛してもらいたい。それが結果としてそういったところに繋がっていくかどうか。

で、この「ぺるりん」を見たときに、みんなが下田っていいねって思ってくれる、そんな存在にさせていきたいと思って活動を続けてまいります。これからまちで見かけることも多くなるかと思えますけれども、皆様何とぞ応援のほどよろしく申し上げます。以上をもちまして発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【発言者2】

皆さん、こんにちは。下田市の白浜に住んで34年になります発言者2と申します。現在日本サーフィン連盟の理事長を務めて、下田ではマリネット下田の役員として2000年より15年務めさせていただいております。

マリネット下田では、下田のマリンスポーツのネットワークづくりをはじめ、小中学生のマリンスポーツ体験の場をつくる活動をしています。また、昨年からは下田市の活動のお手伝いとして、世界一の海づくりプロジェクトの一環として、55歳以上を対象のサブ

スクール、スタンドアップパドルボードというんですけれども、サーフィンボードの上でパドルを漕いで進んでいくというそういう教室を行っています。地元の方にも下田の海のすばらしさを知ってもらい、マリンスポーツで健康になってもらう活動を行っています。

私は東京で育ち、下田に34年前に移住してきました。なぜ下田だったのか。一言で言うと、日本の中で一番好きな海だったからです。下田の海のすばらしさは、白い砂浜、透き通った海、青い空、これ以外にもまだあります。

伊豆半島は陸続きの南の島、西から南から東からと、マリンスポーツに適したうねりが届きます。また東西南北すべての風向きにも対応できるすばらしいゲレンデです。これは意外とマリンスポーツを楽しむ方しかわからなかったりするんですけれども、ここ数年、マリンスポーツを楽しむ外国人の方も多く訪れています。この魅力ある伊豆の海を下田の観光の目玉として、もっともっと伸ばしていってほしいと思っています。

私が所属する日本サーフィン連盟では、年間4戦の日本選手権を行っています。北海道から鹿児島、種子島まで、全国各地で1965年より50年間開催してまいりました。ここ5年間では、20大会のうち7大会、3分の1以上を実は下田をはじめ、静岡県内で開催しています。

それは、サーフィンの愛好者の人口の80%以上が関東から関西の間に住んでいます。車で移動することがマリンスポーツを楽しむ方、ほとんどの方になるんですけれども、陸続きで、関東と関西の真ん中に位置する静岡の海は、マリンスポーツのイベントにとって一番いい場所、一番アクセスがよくて、人が集まりやすい会場です。

実際、例えば九州でサーフィンの大会を行いますと400人しか来ないと、そういう場合でも、静岡の海で開催すると800人選手が集まると。実際数にもあらわれています。東名高速、新東名、東海道新幹線と、やはり日本の流通、人の流れの中の中心に位置する利点をさらに活用して、静岡を、伊豆を活性化できるはずですよ。

アジアからの団体のお客様が多くなっていますが、今後、個人旅行のお客様が増えるためには、「通過する県」から「魅力ある寄り道したい県」にならなければならないと思っています。

伊豆半島の魅力ある海や自然を上手に使えることができれば、富士山の後にもう1日は伊豆へ、そんな旅行プランも増えることでしょう。アジアではサーフィンが人気のスポーツとしてブームになってきています。台湾を初め、韓国、中国、フィリピン、インドネシアなど、サーフィンの愛好者が増えています。海に近い富士山静岡空港をアジアの玄関口として、アジア選手権や世界選手権の県内開催も可能だと思っています。

一昨年、東京国体ではデモンストレーション競技としてサーフィン競技を行いました。また 2020 年、東京オリンピック追加種目候補 33 競技に、現在サーフィンもまだ入っています。野球やソフトボールとともに入っています。今月の 22 日には一次選考通過競技が発表されます。世界で初めてのオリンピックでサーフィンが開催されたビーチになれば、歴史上にも残ることだと思います。

サーフィンやマリンスポーツに適した静岡県伊豆半島がメッカになるよう、日本の中心、アジアの中心として、将来アジアのカリフォルニアと呼ばれるような、そういう下田や伊豆半島になってもらいたいと思っています。

オリンピックまであと 5 年あります。観光もマリンスポーツも大きく変化することでしょう。5 年後、10 年後、静岡が伊豆半島が世界有数の人気のスポットとなっていることを心から望んでいます。

最後になりましたが、今回この会に参加させていただき、発言の場をつくっていただいた皆様に感謝いたします。

あと 1 つ、知事にお願いなんですけれども、実は今月の 19 日、20 日、21 日に磐田市の方でもサーフィンの日本選手権があります。ぜひお時間があれば顔を見せていただくとうれしいと思いますので、よろしくお願ひします。ありがとうございました。

【川勝知事】

発言者 1 さんと発言者 2 さん、発言者 1 さんの場合には U ターン、そして発言者 2 さんの場合には I ターンと、このお二人に共通しているのは、この地域に対する熱烈な愛情ですね。これを実感した次第です。

発言者 1 さんは今下田青年会議所理事長をお務めになった後、下田商工会議所青年部だと。

そして、ゆるキャラを持ってこられたわけですが、私は今日の「ぺるりん」くんが今日は衣装直しをして入ってくるというので、どういうふうにしてこちらに来られるのかと、あれだけの大きな図体で。今日はその秘密を明かされなかった。これは企業秘密らしいんですよ。こんな小さくなるんですね。それがこんなに大きくなるんですって。

これはやっぱりこういう実にアイデアがいっぱいで、下田を愛して、そして「金目樽」という独自のキンメダイに引っかけて、ロンドンオリンピックのときに金メダルを取った人に「金目樽」というキンメの樽を差し上げて、NHKのニュースで全国放送された。ですから下田の道は世界に通ずるということを感じているんですね。「ぺるりん」は何しろ太

平洋の向こう側から来たんですから。

そしてここはきれいだから、毎年黒船祭やっているじゃないですか。私も6回来ていますもの。もうアメリカの方たちが、それを喜んで、きれいで、そして何がきれいかという、もちろん海と陸とのこの景観の調和がすばらしいと。この発言者2さんという人は、日本のサーフィンの理事長ですから。その人がここが最高だと言ったら、本当に最高なんです。

昔は津々浦々といって、それぞれ物を運んだり、人が海を伝わっていくというのが一番簡単だったわけですね、陸路は大変ですから。そういうのが今はスポーツになっています。スポーツということで、2020年にオリンピックが来ると。2019年にラグビーのワールドカップがあると。2018年に国際スポーツの女子ソフトボールの大会が、ひょっとすると静岡県で行われる可能性もあると。

それからまたオリンピックについては、ひょっとするとその種目の1つが伊豆半島で行われる可能性も出てきておりますね。そして今伊豆半島のジオパークということで、今日か明日お帰りになる委員の先生が見て回られました。それから韮山も、これちょっと北の方ではありますけれども、そこが世界の文化遺産になるというニュースが流れた途端に観光客が3倍に増えました。ですからすごい追い風が吹いています。

そうした中で健康志向ですから、スポーツということになって、一番人口が多いのが首都圏であり、そしてこの中京圏、関西圏、そのど真ん中であって、一番楽しめるところ、景色がいい、そして世界クラスの資源群が10以上あるんですよ。皆さんのお手元にあるかどうか知りませんが、富士山が世界文化遺産になった途端に、お茶が世界農業遺産になるとか、もういろいろなものがどんどん、どんどんと、何か雨後の筍のように世界クラスのものを実際17あります。可能性のあるものを入れると20になります。そんなところは東京にはありません。日本のほかにどこにもありません。

ですから、こういう本当に世界を見てきた発言者2さんのような方が、海から見てここはすごいと。磐田もいいし、あるいはほかのところもいいし、日本選手権を今度は磐田市でやると。だけど、20回のうち7回ぐらいはこちらでやっておるんだとおっしゃっているわけですね。だからスポーツを媒介にして海から、あるいは海の美しい景観、波の美しい景観、また波乗りしながら見る、その陸の美しい景観、こうしたものを享受しながら、一旦スポーツが終わったらおいしいものを食べる。食べる物に事欠かないですね。

一番うまいコシヒカリ、どこから出てきたかというところからでしょう。「愛国米」から

ですよ。今日は南上小学校の子供たちがこれから田植えをするというので、その「愛国米」の苗を私に見せてくれました。ですから一番日本の最高の米だって、ここからいっているわけですね。だから陸地の最高の製品、そこから出てくる「身上起」、あれを飲まないで日本酒を語る資格はないとさえ、最近言われておりますが。

そういうことをごさいますて、こういうお二人の愛情というのは、必ず僕は実を結ぶというふうに思っております、お二人の話を頼もしく聞いたということをごさいます。私どももお二人のこれからの動きをしっかりと注目しながら、できることで協力してまいりたいと思った次第でございます。ありがとうございました。

【発言者3】

こんにちは、NPO法人風楽の発言者3です。下賀茂に移住してきまして13年目になります。よろしくお願ひします。

私は日本酒が結構好きなんですけれども、まだ「身上起」はもちろん飲む機会がありません。私たちNPO法人は、NPO法人として立ち上がってから5年たちます。主にどんな活動をしているかという、子供から高齢者の方までの福祉活動がメインだと思います。

趣旨として、風楽を立ち上げるときの初心を忘れないようにと思つて決めたことが、つらつら読ませていただくんですけれども、物があふれ情報が飛び交う今、人と人が触れ合う機会が減り、一方で人々の生活スタイルやニーズは多様化しながら、毎日が駆け抜けるように過ぎていきます。ふと立ち止まってみると、何か足りない、何か不安だと思つことがきつとあると思ひます。障害のある人も、御老人も子供たちも、そして子育て奮闘中のパパもママもみんな自然あふれるこの南伊豆で安心して豊かな生活を送ることができたら、とても素敵なことだと思ひます。人と人との輪、つながりを感じて暮らせるまちづくりを目指して、風楽を利用する人がほつとできる、そんな存在でありたいと考へ、活動をスタートさせました。と、ちよつと何か偉そうなことを言つているんですけれども、そういうことで、こつちに移り住んで12年、一番最初は本当に自分たちの子供のママ友たちで集まつて、何かできないかねというところからスタートです。

今現在やつている活動は、南伊豆町から委託を受けまして、放課後児童クラブを南中小学校で行つていまして、一応南上小学校と東小学校も送迎を行います。

それからこれは下田市と南伊豆町の委託を受けているんですけれども、乳幼児発達訓練指導事業、すくすくサークルといひます。今日の午前中も下田のすくすくサークルへ行つてきました。ここは乳幼児、就学前の子供たちで、ちよつと言葉が遅いかなとか、お母さ

んたちがちょっと心配があるよという子供たちを小集団でちょっとサークル的に活動しようという行いです。

それから障害者のためのキャンプというのを年に3回やってまして、明日もそのキャンプなんですけれども、賀茂地区の方を対象に行っています。本当に役場の方々にもいろいろお世話になっていまして、その障害の方たちのキャンプをしながら、障害の方たちを一般の方がボランティアをすることで障害の方たちを理解するという活動もちょっとしたいなと思ってやっています。結構楽しい活動です。

それから最近始めたのが、共生型のデイサービス「おっけい」というんですけれども、分校のすぐ近くです。ふじのくに型というと思うんですけれども、子供からお年寄りまで、障害のあるないにかかわらず、だれもが利用できるデイサービスということで、利用率は1日20%ぐらいしか稼働してないんですけれども、広がっていくといいなと思っています。

それから三浜小学校で27年2月から認知症カフェ「あまなつ」をオープンさせていただきました。これを立ち上げるにはいろいろ反応があったりもしたんですけれども、今のところカフェ自体は毎月1回、第2木曜日の1時からから2時半まで、認知症に興味のある方や、実際自分の御家族がそうなんだよという人とか、昨日カフェがあったんですけれども、お子さんを連れてきてくれた人もいて、誰でもいいです、来てください、みんなで地域を支えましょうという会になっています。

今のところそんな活動をしているんですけれども、今私が思うことが、今年、そこにも来ているんですけれども、三浜地区の地域おこし協力隊の方も来てくださっていて、今三浜がどっちかというアゲアゲのような感じがしてしまっていて、せっかくある三浜の小学校、とてもいいところで景観もいいし、もちろん避難場所としての設定もあるんだろうけれども、あれをあのまま置いておくのはちょっともったいないなと思うのが実情で、そこで超いい場所で、月に1回だけ「あまなつ」をやらせていただいているんですけれども、何となく有効活用ができたかなという気がしています。

それから自分たちが活動していく中でもう1つ思うのは、学生時代のマンパワーが欲しいなということを感じていて、大学がないので、下田に看護学生の学校ができましたけれども、看護学生はボランティアのお誘いをして、超多忙らしく、ボランティアをする時間はないということで、ここに大学が誘致できるか、それはちょっと難しいかもしれないんですけれども、その空間の学生さんがいると、後先考えずにボランティアを一生懸命やってくれる感じでマンパワーになるのかなという気がちょっとしています。そんな

ことを思いながら、日々、母として、妻として頑張っている感じです。ありがとうございました。

【発言者4】 こんにちは。南伊豆町でききがきやというサークル活動をしております発言者4と申します。私は普段山の中で野良仕事をしておりまして、今日このような場所にお邪魔させていただいて大変どきどきしております。ですが、隣に知事がいらっしゃるといふこのような席に座らせていただいて、すばらしい機会をいただきましたので、今日は頑張ってお話しさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

聞き書きというのは、聞いて書くということなんですけれども、私たちの活動にはそれにとどまらない何かすごい可能性があるんじゃないかなと今感じています。ききがきやは、平成25年の4月から活動を始めました。当初のメンバーは4人です。それに南伊豆で今一番元気な場所、NPO法人南伊豆湯の花の後援をいただくという形でスタートしました。

長野県木祖村というところがあるんですけれども、その「聞き書き」というたった1冊の本に出会いまして、この南伊豆バージョンをやってみようよという軽いノリで無謀なチャレンジをしてしまったというのが実情です。

もちろん全員が初めての体験で不安だらけだったんですけれども、怖いもの知らずといひますか、そういう強みで企画から本の発刊まで、すべての活動を自分たちが楽しむ、そして酔いしれてしまったというような、そんな感じの活動です。

よく南伊豆に来られた方から、「ここはいいとこだね」と言われます。でも、ここに生まれ育った私にはそれはもう当たり前のことで、そのことにさえも気づかずに、いつも都会のことばかり、都会に目を向けていたという感じですね。

今回改めてもう一度しっかり地元を向けてみますと、南伊豆には豊かな自然があります。それから宝石箱のような海山の食材があります。かつては鉱山も数多くあり、伊豆木炭や伊豆石に代表されるような資源もありました。そして何よりも魅力的な人に恵まれていると思います。それらを守り続けてきた人がここに暮らしていたんですね。

聞き書きの活動では、話し手となっていただく方は、特別な方ではありません。ごく普通の御近所のおじいちゃん、おばあちゃんにお願いします。それなのにそのお一人お一人のすばらしい人生ドラマがありました。私たちは皆様から何うごく当たり前の日常の暮らしの話の中に、生きるための暮らしの知恵や工夫、技術など、私たちが時代の流れの中で忘れてしまっていた大切なことを学んだような気がします。

そのお話を早く皆さんにお伝えしたいと執筆に入りました。実はそこから先の編集作業

というものがあまして、それが私たちには大きな壁で難題でした。ただ、南伊豆町には地域おこし協力隊という方々があまして、そこでその力を借りることができました。

地域おこし協力隊によるサポートは、私たちの活動を支えてくれる本当にビックなパワーでした。そういう技術や能力、発想力、そういうものを持っている方が地域にいてくださったおかげで、南伊豆から発信をすることができたのではないかなと思っています。

せっかく任務についてくださっているのですから、私たち地元住民は彼らに何かしてもらおうというのではなくて、共に活動していく、何かそういう姿勢を持つことが大切だなと思いました。

これまでの活動で、地域の高齢者の方々のお話で、私たちは想像以上の学びの場を持てたんですけれども、知っていたようなんですけれども、実は何もわかっていなかったという自分が恥ずかしいくらいでした。

活動の成果として『知ってんけえ』というタイトルでこれまで2冊の本として刊行することができました。現在3冊目の準備を進めております。これはまた泣けるお話ですので、どうぞ御期待いただきたいと思います。

本という成果物だけではなくて、話し手となってくださった方々も、昔を思い出して、楽しそうに語ってくださいました。聞き手である私たちも、思いがけない穏やかな時間を共に過ごすというそういう時間をつくることができました。

また1つのお話から多くの方々への広がりがあり、そこからまた出会いや交流が生まれるというそういう連鎖もありました。かつての南伊豆の地域の暮らしには、失ってはならない、本当に大切な生き方があるのだと思います。何もない南伊豆ではなくて、何でもある南伊豆、ここに暮らし続けることが地域を守っていくことなのだなと今感じております。

移住という形でここに暮らす方々も、伊豆に生まれ育った子供たちも、この地域に誇りを持って、働く場をつくり、暮らしをつくっていく、そういうことができれば、伊豆の豊かさはいつまでも失われることはないのではないかなと今思っております。今日はありがとうございました。

【川勝知事】

発言者3さんと発言者4さんのお話を伺いまして、感動して聞いておりました。

発言者3さんの場合は、12、3年前にこちらに移り住んでこられて、障害者を持つお母様方と一緒に健常者も障害者も、やがて老人も子供も、同じように社会をつくっているの、そこで何かができないかということで、この活動を続けてこられて、今もう12年になられ

たと。そして今や地域のリーダーの1人といたしまして、この南伊豆の町の方からも委託を受けて仕事をされるまでになられたということで、女性の持っている力、これを生きた形で証されているのではないかと思います。

その最後の方で、三浜小学校が今廃校になっているんですか。小学校というのは、一番子供たちが通いやすいところに立地していますので、この活用法について発言者3さんほか関係者がこうした方がいいという御意見があれば、これは傾聴するべきだというふうに思います。今日はもう町長先生もいらっしゃいますし、うちの県の実質トップも今おりますので、それ一緒に考えていくということをしたらどうでしょうか。

私は実は先ほど南上小学校に行ってきたわけですけども、そこは今49人で、これ以上下がってくるといろいろと小学校の存立の問題についても考えざるを得ないと。しかしこの立地も素晴らしいです。ですから小学校とか中学校というのは、もう地域にとって子供を育てる一番大事なところですから、立地場所というのは最高であるはずなので、そして新しい使い方ということは、その場所が声なき声で要求しているんだと思うんですよ。それをよく聞いて、どういうふうにすると南伊豆のためになるか。そしてこのNPOの活動のさらに活性化につながるかということを考えてくれということですので、考えましょう、一緒に。

それから発言者4さんは素晴らしいですね、もう本当に。多分長野県の木祖村を抜いたんじゃないですか、もう、聞き書きで。実際、沼津に山形の方の大学で博士号を取られて、先生されていた女性ですが、突然、特養といいますか、老人のケアをする仕事に入ると。

なぜかという、そこでお話を聞くということの重要性に目覚めて、そしてそれを本に出されて、サントリー学芸賞を取られたんですよ。これは学問的に最も高い若手に与えられる最高の賞なんです。

それで、そのときには老人ですから、こちらがお世話をするとおもうと間違いだ。お話を聞いていくうちに学ぶことが多いということで、この方はきちっと学問をした方です。また周りにいっぱい相談する人がいたので、立派な本にされたわけですね。それが学者の目にとまって、これはもっと知られるべきだと。

ところが、発言者4さんの場合には、御自身で3、4人で、たまたま長野県のそれがあるなら私たちもやってみよう。そうすると地域資源や、景観や、これまでの歴史や文化が、そしてそれは一番肝心なのは人だということで、その人の人生ほど大事なものはないと。実際、子供たちが通常、一番よく覚えているのはお父さん、お母さんが勉強しなさい

とか、遊んじゃだめだとか、本を読めとかということよりも、おじいちゃん、おばあちゃんが孫に語る言葉ですね。おじいちゃん、おばあちゃんから聞いた言葉というのは、愛情だけですから、ですから聞くに値するし、教育効果もものすごく大きいと。

そうした方が自分の人生をまとめて語っていくうちに、聞いている方たちが、聞いてやるとかという立場でなくて、もう知らないことがいっぱい学ぶというそういう姿勢に変わったと。聞く方がいいですよ、いや、聞く方たちの人格も高いということですね。これがいい。それはまた話してられる高齢者の方と、これを謙虚に聞くという人、両方とも立派ですね。

そこから出てくる、じゃそれをどういうふうに人にそれを知らしめるかとなると、これは話しているのは前後したりしますから、それをしっかりと編集をして、読むに値するものにしなくちゃならない。1冊ぐらいは簡単なんですよ。2冊出すというのはこれすごい力が要ります。3冊目というのはもっと力が要るんですよ。3冊目である程度のところまでいくと軌道に乗ることがあると思います。

私はこれは学校の国語の教科書よりも大事だと。学校の国語の教科書は、北は北海道から南は沖縄に至るまで、同じものを読ませるわけでしょう。だけど、一番子供たちにとって生きた知識になるのは地元の知識です。それを地元の言葉で『知ってんけえ』ということで、そういう方言も入れながらそれを学ぶというのは生きた知識になりますから、ですからこういうものを教材に取り入れながら、これから教育をしていくのもいいんじゃないかと。

そしてテキストは生きている人、生きている自然、そして周りにある景観、海や山や、そして災害の歴史や、そうしたものこそ本当に生きた知識になると。そうしたものが共通の知識とどう違うかということで、副読本として教科書を使えばいいと。教科書の副読本としてこれを使うんじゃないかと、反対だと。一応一般的な知識も持っていた方がいいというぐらい、それぐらい本当に生きた知識というものに満ちた本が2冊出て、今度御自身が泣けますよとおっしゃった。いい話だったんでしょうね。きっとそういうものに違いありませんので、請う御期待ということで。どうもありがとうございました。大変いいお話を伺いまして感じ入りました。

【発言者5】

皆さん、こんにちは。私は南伊豆町の青野という地域でイチゴの栽培と販売をしていま

ず発言者5といたします。どうぞよろしく願いいたします。

まず簡単にではありますが、私自身の自己紹介をしたいと思います。私の家では父親の代からイチゴの施設栽培をしております、私自身も平成22年に就農したんですけれども、以前は飲食関係の仕事など、ほかの仕事をしていまして、実家に戻り、就農する決意をしました。

それで就農する際になんですけれども、県の制度である就農支援資金という制度を使わせていただきまして、いろんな支援を受けながら就農し、現在、父親のもとでいろいろ指導を受けながら、父親の経営から部門を分けるという形で、現在自分で独立して経営させてもらっています。

その後もいろいろと、ちょうど今日もこちらに見えています賀茂農林事務所の方ですか、あとJA、町の産業観光課の方やいろんな方々の支援を受けながら現在に至っています。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

そして平成26年なんですけれども、青年農業士というのに認定していただきまして現在に至ります。

あと経営の内容なんですけれども、今うちではイチゴを2品種栽培しております、「章姫（あきひめ）」という品種と「紅ほっぺ」という品種を栽培しています。主な販売先としては、JAの共販を通じての市場出荷と、あとは地元の直売所や一般店舗への直販を主な販売先としております。

また今、静岡では新品種の「きらび香」という品種が試験栽培されている段階なんですけれども、幸いにも少量ですが苗を手に入れることができまして、これから栽培の方に取り組んでいきたいなと思っております。

今私はイチゴ栽培農家でJAの青壮年部という組織に所属しております、ちょうど今青壮年部の南伊豆支部の支部長も務めさせていただいております。青壮年部の活動で、地域の子供たちを対象にした食育活動といいますか、そういった活動もしているんですけれども、愛国というお米、あのお米も私たち青壮年部の活動として小学生や子供園の子供たちとともにお米の栽培なども行っています。

そのほか食育活動の一つとして昨年から新たに始めた事業があるんですけれども、その話をさせていただきます。その事業は育農プロジェクトと名付けまして、県立下田高校南伊豆分校の生徒を対象にしまして、イチゴの栽培から収穫、加工までの一連の作業を体験してもらおうというものです。

この事業をスタートさせるに当たって、町内に下田高校南伊豆分校という園芸科のある学校があるんですけども、その学校の卒業生が、ほとんど農業や農業に関する仕事に卒業後就いていないという現状があるものでして、ちょっと何か寂しいなという思いもして、あと、この南伊豆町はどうしても農業に従事する方の年齢がとても高いので、なかなか若い農業の方が正直いません。少数ではあるんですけども、よそから移住してきて農業に従事される方もいるんですけども、全体で見るとやはり少ないのが現状だと思います。

そういった状況の中で、高校生などにも地域の農業を取り巻く現状などを理解してもらいたいと思いますし、また農作業を通して、大変な面もあるかと思うんですけども、やっぱり収穫する際の喜びですとか、そういうことも知っていただき、農業に興味や関心を持ってもらえたらなというのが、この事業をスタートしたきっかけになります。

あわよくばですけども、将来卒業し、地元の農業ですとか、農業に関する仕事に就いてもらって、地域を盛り上げていただけたらなというふうに思っています。

この事業でイチゴを取り上げた理由としまして、私自身がイチゴを栽培しているということもあるんですけども、ここ近年、南伊豆町に移住してきた方でイチゴを栽培し始める方が、少数ではありますが、増えているという現状がありますし、作物の中で割とシーズンを通して価格の方が安定しているなどの利点もありますので、将来性のある作物じゃないかなということでイチゴを選ばせていただきました。

この育農プロジェクトの内容なんですけれども、よく農業体験といいますと、植え付けですとか収穫とかの要所要所の大きい作業だけ体験するということがありますけれども、できるだけ余り日の目を見ないような作業といいますか、地味な作業、そういった作業もとても大事な作業だと思いますので、極力そういった日常の栽培管理の作業といいますか、そういった作業も体験してもらって、農家の日々の仕事というのを学生たちにもイメージしてもらえたらなと思っています。

ただ、だからといって大変な作業ばかりではちょっと息が詰まってしまうと思いますので、そういった各作業の合間には収穫したイチゴを使ってジャムづくりですとか、お菓子をつくってみたりとか、そういったようなことを生徒に体験してもらって、楽しみながらイチゴのいろんな活用の仕方などもいろいろ知っていただけたらなと思います。

そして、この育農プロジェクトなんですけれども、1年間で終わりという形ではなくて、まず1年生に簡単な作業から始めてもらいまして、1年で終わりということではなくて、

2年目にはまた1年目にやったことを基本といたしまして、そこからステップアップした内容を2年生になったら行ってもらいたいと思っています。そうすることによって長期的な視野で理解を深めてもらえたらと思って予定しています。

何分まだ始めたばかりの事業なので、いろいろと至らぬ点とかもあるかと思うんですけども、関係する方々からの協力も得ながら、また意見、要望なども取り入れながら事業として充実させていければと思います。

最後になりますが、私はこういった食育活動を通じて、地域の農業、ひいては地域の産業を盛り上げていけたらなと思いますし、それによって南伊豆をより活発的なまちにしていけたらと思います。御清聴ありがとうございました。

【発言者6】

有限会社スタイルの発言者6と申します。今日はよろしく願いいたします。

私は皆さんとちょっと違うような内容なんですけれども、私は下田市でモデルカーのネット通販というものをやっています。私は南伊豆町出身でして、20代前半は、今こちらにもいらっしゃいますけれども、下田市にある会社さんの方でお世話になりました。上司が何人かいらっしゃっています。

その後、私の主人の会社の方に移りまして、OLとして働いておりました。その中で平成14年の7月頃ですね、1円でも会社をつくれるという、設立できるという法律、最低資本金規制特例という制度の情報がこちらに入りまして、勤務先の社長ですね、彼、主人の方に相談しまして、古い言葉ですけれども、社内ベンチャー的に始めましょうかということで、会社の設立をすることにしました。

その際、せっかく起業するんでしたら県内で一番最初の設立を目指したいなということで、施行されるのが2月1日だったんですね。平成15年2月1日に施行されたんですけども、その前から、多分これくらいかなということで準備を始めていました。

下田市ではというよりも、全国的に前例がない、聞いたこともない制度の扱いということで、法務局、公証役場、そして銀行さんですね、こちらのやりとり、非常に時間がかかりました。ですが平成15年2月21日、無事起業できまして、最低資本金特例を利用した起業の静岡県内第1号に弊社がなりました。

ここで本来起業目的だった事業をするはずだったんですけども、起業してから数カ月たったころに、車のディーラーの横を通って毎日出社していたんですけども、車のディーラーに飾られていた車のカラーサンプルですね、今もよくあるかと思うんですけども、

これが気になりまして、ネットで調べたところ、モデルカーという商品がありまして、ここで初めてモデルカーというものを知ったんですね。

今日お持ちしたので。こちら、こんな感じですけども、今日はちょっと派手なものを持ってきました。こういうミニカーというものを多分初めて見た方も多いかと思われます。こちらは残念なことに国内のメーカーのものではなく、ドイツのメーカーのものなんですけれども、こういうものがあるというのを初めて知ったんですね。

それで私個人的に父も弟も車とかバイクとか大好きで、よくレースを見たり、何を見たりという形でやっていたし、私自身も大型のバイクの免許を取得しちゃうぐらい好きなので、こういうモデルカーというものに対しても、興味を持つというのはとても早かったんですね。モデルカーについて市場調査をして、主人である社長にも相談した結果、インターネットによるネット通販の方を開始しました。これが15年7月ですね。

当時、モデルカーのネット通販というショップはそれなりにありました。ですけども、車種とかモデルカーのメーカーですね、こちらがわからないと理解できないような、要はマニアックなホームページというものが非常に多かったんですね。私たちもちょっとよくわからないなというホームページが多かったです。

モデルカー・イコール・マニアというイメージをまず壊したかった。初めての方にも気軽に買うことができるショップにしたいという希望があったので、ホームページ作成時にも、初めて見たお客様にもわかりやすく、検索がしやすい、商品の検索が簡単にできるホームページをつくって、お客様を増やしていくという努力をさせていただきました。

ネット通販ですね、もうやっている方はかなり多いかと思われます。24時間、365日、本当にお休みがない仕事ですね。全国の方を対象にしておりましたので、いろいろと考え方の違い等で大変なこともあります。ちょっとした失敗、この程度ならまあいいかなというもの、そういう気持ちは即結果としてあらわれます。これを元に戻すというのは非常に時間がかかります。

当然実店舗でもそういうことは言えるかと思いますが、実店舗で1の失敗が、ネットでは100の失敗ということを非常に実感しました。悪いうわさが広まるのも本当に一瞬です。あっという間です。うんうんとわかってくださる方は結構多いかなと思うんですけども、気が抜けない、本当に緊張の連続、でもこれが仕事のやりがいというものにつながっている状態になります。

私が起業をするとき、下田市、南伊豆、基本的に観光が産業の8割を占めるんですね。

起業した際に、ある地元の方に観光以外で起業するなんて信じられないと言われました。でも静岡市役所の方とも交流がありまして、静岡市の今結構上の方に行っていらっしゃる課長職の方にも、「引っ越してくればいいじゃない、静岡に」「下田にいる必要ないじゃない」とよく言われたんですけども、私の考えですね、当初のものなんですけれども、「外貨」を稼いで下田市に税金を納めようということです。

これ観光業もそうですね。お金を落としていただく。とにかく落としていただく。下田市内で、南伊豆でお金を回すのではなくて、東京、全国ですね、あちらこちらからお金を落としていただくというので、それを「外貨」といっているんですけども、こちら下田、南伊豆の方に、生意気なすごい言い方なんですけれども、若者代表として、女性として少しでも多くの地域還元というのができればとこだわって、下田市に本社を構え、そして動かしていません。まだ当分というか、出ていくつもりもありません。

今後についてなんですけれども、伊豆縦貫道ができれば観光の方も変わりますけれども、今後Uターン就職を望む方のための環境整備というものをさせていただく、こちらは急務じゃないかと思います。実際に今こちらの壇上にいらっしゃる方でUターンの方も多いですけれども、下田、南伊豆に大企業があれば話が早いですね。でもないじゃないですか。それじゃどうすればいいかという、私の考えなんですけれども、中小企業、一人でも多くのUターン就職希望者を受け入れる環境を整えるための企業側の経営努力と、その辺のサポートに関しては官民一体ということで、賀茂振興局長さん、お願いします、その辺のサポートをまたいろいろ考えていければと思っております。

若者の起業というのを増やしていきたいなというのがあります。それに伴う支援ももちろん必要だと思うんですけども、私が28歳のときに起業をしたんですけども、大体、ほぼ9割以上の方が、会社なんてつくってないで、さっさと嫁に行けと言われました。ええっと、そうですかと思いましたがけれども、モデルカーを販売するというと、「ええっミニカー？」と言われました。自分がそういう否定的な反応をされ続けていて、今でも言われることがあるんですけども、なので起業してから、会社を興したいと御相談にくる方がいらっしゃったけれども、絶対否定的な言葉は言わないで、なるべく私のできる応援とかアドバイスをさせていただきました。

Uターン希望者の受け入れというのに関しては、それ以前に多分発言者1さんのように郷土愛という感じですね、郷土愛を育てる教育、今もしているかと思えますけれども、さらなる強化をしていただければと思うんですね。例えばある島の高校なんですけれども、

そちらでは地元の方はもちろん、全国の学生を受け入れています。そこでは町長になりたいと思う人材を育てようということで、実際にそういうふうに行っています。

その学生さんにアンケートをとったところ、大学を卒業したら町に戻りたいという希望者がほとんどだということでした。これ御存じの方もいらっしゃるかと思いますけれども、某町さん、Uターンの方が多いことで、こちらを下田市、南伊豆も同じような感じだというのは変ですけども、郷土愛、地元を愛しているという部分の気持ちを育てるとともに、一度外に出て経験と人脈を持ってかえってきて、地元の活性化、若者の起業というものに生かしていきたいなということを思っております。そのための受け入れ先、私たちも頑張って、1人でも就職を受け入れられるような企業としての努力をしていきたいと思っております。

要望です、2つほど。私、息子が小学生なんですけれども、学力の向上ですね。知事は学力テストの関係のことでいろいろお話しされて、今回、前回ですか、15位順位が上がったということで、さらなる学力の向上のために努力というか、協力をお願いできればと思ひまして、あと、息子が病気になったときに非常に大変でした、こちらに住んでいて。伊豆半島に住むというのは、非常にリスクが高いなというのを本当に実感したんですね。その辺のことで縦貫道が早く完成してくれればうれしいというのがまず一番だったのと、地域医療の充実、こちらに関してはちょっと難しいかなとは思いますが、少しでも充実していただければなということで思っております。

あと海に囲まれています。海にも山にも囲まれていますので、防災・減災対策の強化をしていただければと思います。これからも本社を下田市から移すことなく、下田市・南伊豆町の方に貢献できるように努力を続けていきたいと思ひます。では御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】

発言者5さんと発言者6さん、両方とも企業というか、仕事において共通していたと。さらにお二人とも南伊豆の御出身で、一方は南伊豆で、他方は下田で仕事をされているということですが、もう1つの共通点は、やっぱりお父さんの影響が大きいということですね。やはり子供は親を見て育つというその親の背中を見て育つといいですか、親の影響を非常に大きく受けるという、しかもいい形でお受けになったと。

もちろん発言者5さんの方はお父様がイチゴをつくっておられたと。それから発言者6さんの方は、お父上が車に夢中だったと、こういうわけですからね。ですからもうミニカ

一を見た途端に気になったというのは、もうお父さんの目で見ていますね。それが今、起業で成功されて通販のトップレベルのこの方面での仕事をされるということになったということで、尊敬するお父さんの好きな、その好きな気持ちがそのまま仕事につながっているということじゃないかと思います。これは別に意図してそうなったんじゃないかと、そういう形になったのでないかというふうに思ったわけです。

それで発言者5さん、イチゴで章姫と紅ほっぺ、最近のきらび香にもちゃんと情報のアンテナを巡らせておられまして、こちらのイチゴは品質が高うございます。そして紅ほっぺは首都圏のあるデパートで、一時期ある特定の期間「紅ほっぺ週間」というんですかね、もうすべての食堂が何らかの形で紅ほっぺを使うという、これはちょっと酸味がありますから、甘いショートケーキなどと、これを半分に切ってもきれいですね、それでお使いくださるということで、紅ほっぺといえば静岡県ということでございます。

同時にまたきらび香という、小さい、それほど大きくありませんけれども、あまおうよりも甘いというそういうものが今つくられつつありまして、そういう意味でイチゴというのは可能性があります。

さらにまた最近では香港あたりで非常に高値で売れるということで、今飛行機があちらこちらに飛んでおりますので、そういう東アジアの方面で高い品質の静岡県の農産物を、農産物とは言わないで農業芸術品、つづめて農芸品と。もうですから発言者5さんのところでつくられているのは皆農芸品です。

それで、せっかく下田高校の農業の分校がありますね、私行きました。そしたら青年たちがヤーコンをつくって、そしてそれをそばにして、ヤーコンのそばをいただきましたよ。おいしかったです。それもちゃんと研究して、粉にするにはどうしたらいいか、何にするにはどうしたらいいか、あちこち静岡県下の実用している人のところに行って、そこで聞いているんですね、学校の先生は教えられないので。ですからそういうところに行ってやった結果が、すばらしいヤーコンという製品になったわけです。農協で売っていたと思いますよ。

去年行ったんだと思うんですけども、そしてただ今発言者5さんから聞くと、せっかく農業関係の高校出たのに働かないと。そしてそれは恐らく農業をやりたいから農業の高校に行っているに違いないので、やむを得ず働けないというところもあるんでしょう。

それはやっぱり農地がないとかいうこととも関係しているかもしれない。そうすると農地がないのかというと、耕作放棄地がもうすさまじいばかりにあると。私が知事になった

ときに1万2,000ヘクタールありました。これはすさまじい数字だと。その5年前は8,800ヘクタールだったんですよ。それが1万2,000ヘクタールになった。1.4~1.5倍伸びたんですね。

これは放っておくと大変だということで、それで何としてでもこれを耕作地に戻すということで、3,000ヘクタール近くまで戻しました。しかし1万2,000ヘクタール、これ全体の静岡県の耕地の17~18%に当たります。日本全体の農地のうち耕作放棄地は7点数%です。静岡県はその倍以上17~18%あって、これはもう大変なことだということで、3,000ヘクタール以上耕作地に戻したんですが、しかし1万2,000ヘクタールのうち半分くらい、6,000ヘクタールくらいは、もう不在地主化して、だれが持っているかもよくわからないし、東京とかどこかに行っていっちゃると。そしてもう荒れ放題になっていると。だから戻しようがないくらいになっているんですよ。これからあと残り3,000ヘクタール、今3,000ヘクタールやりましたから、残り3,000ヘクタールやっていこうと思いますけれども、やはり非常に厳しいところになって、伸び率が減っていくと思います。

こうしたことを許しておいていいんでしょうかね。だからもう空き家になっているものに対して、空き家の家の木がどんどん道路に張り出しているとか、家をもうツルが食い荒らしているとかいうようなところは、行政が力を入れて、それを処分してよしいという特定空き家法というのが、つい1週間ほど前に通りました。空き家でそうなら、空き地といいますか、耕作放棄地に対してはもっと厳しくした方がいいというふうに思います。

そうしたところに、本当に農業をやりたい人に自由に使っていただけるようなシステムを入れた方がいいと。最初、これを耕作地に戻すのは大変かもしれませんが、ちゃんと技術を持っている、しかも北側には田方農業高校というすばらしいところがあります。そういう青年たちを教育しながら、その働き場がないというのは、誠にとって残念なので、南伊豆でどこか、そしたらもう町長さんは、お試しの農場をやるんだということで、いきなり農家で自立するなんてなかなかできません。ですから最初はまね事というか、農業ごっこみたいな、そういうことから始めるというようなことで、本当に好きかどうか、やっていけるかどうかと。そのための土地が要ります。

そういう土地がないのかというと、耕作放棄地があるから、こうしたものを活用するために、賀茂振興局長と私と、それから町長さんなどで力を尽くして、これはもう大地に対する悪行であるということで、これを許してはいかんというぐらい強い気持ちで耕作放棄地の活用をしていきたいと。これは別に農地を取り上げるとなると大変かもしれませんが、

所有者に対しては地代を払うにしても、所有よりも活用すると。土地の所有から土地の利用に変えていくというそういう利用しやすいように耕作放棄地を変えていくという今そういう時期に来ているんじゃないかというふうに思っております。

これはもうこの6年間、耕作放棄地の解消に力を尽くしてきた、そうした中で出てきたことなので、それがあつ程度、土地はありますよと。これは町が管理しています、あるいは農協が管理していますと、あるいは中間管理機構が管理していますと、ですから使ってくださいと。最初はお試しでもいいですよというようなことで、だんだん、だんだんと力をつけていただいて、周りの人たちから学んで、農業として自立していくというようなことができるわけですね。

そして食品はこれから伸びていきます。2兆円産業にしようというわけでしょう、輸出品で。ですから我々は439もの食材があります。日本一です。食材の王国です。だからこの食材を今度加工すると、また付加価値がつきます。ですから加工するにはやっぱりいろんな技術が要りますので、そのときには工業といいますか、ものづくりと結びつく必要があります。これを販売するとなれば、例えば通販だとか、さまざまなサービス産業の知識も要ります。だから1×2×3ということで、あるいは1+2+3も6です。この6次産業化というような形で、それぞれの違う人たちが力を合わせるというそういうことをして、食品加工、こうしたもの、それから食材ですね。食材は決して品質は落とさないよ。

その加工品でいいものを我々はブランド化していくということで、実は食のセレクションとか、食品のセレクションとかとして、県としてこの5年間ぐらいしてきたわけですよ。特に発言者5さんの場合は青年農業士ですから、青年農業士というのは学校で言えば准教授ということですよ。農業経営士というのはいわば教授ですよ、農業における。話し下手かもしれない。しかし体で知っているよ。だからその人たちには、子供たちが現場に行つて教われればよろしいよ。そうすると言っていることがもうすぐわかる、体でわかるということで、ですから青年農業士、あるいは農業経営士の方というのは、本当に尊敬されるべき存在だというふうに思っているんですよ。ですからそれで今食育してくださっているというので、誠にありがたいよ。

小さいときから土に親しむとか、それはもう東京の子はできませんから、じゃあ東京の子ができないなら差し上げればいいだらうよ。山村留学させればいいと。どこがいいか。

向こうの小学生などがこちらで山村留学、学校で「先週の2時間目何した？」と言つたつて、全然覚えてないですよ。ところが南伊豆というところに行つたというのは一生忘れ

ないですよ、体で覚えるから。そんなに遠いところじゃないです。そうしたときに、例えば先ほどの学校を使うとか、廃校になっているところですね。そうしたところを上手に使いながら、山村留学で都会の子供たちに土に親しませると。

しかし、こちらの子供たちがちゃんとそういうものについて、「あっ、何だ、僕たちの方がよく知っている」というその感覚ですね。それはもう自信にもつながりますから、だからそういう意味で我々は自分たちの持っている有利なところを外に発信する勇気を持ちたいと思うんですよ。そして事業をする人、それをきちっと記録して残していく人、それが地域の財産になりますよね。

そういう意味で、やっぱりこれ人が一番大切ですけれども、閉じられてはいけないうと。海に囲まれていると言われましたけれども、それじゃ海に開かれていると言うべきだと思いますね。下田、これはもう太平洋の向こう側の人に来たところであります。ここは景色がきれいです。海から見た景色が特にきれいですね。しかし今はもう船で移動するとか、船で物を運ぶということにもまして、陸路であるので、伊豆縦貫道というのは決定的に重要です。

今伊豆縦貫道は、皆様方新聞記事ごらんになったら、事業の先送りをしたことは一度もありません。すべて計画どおりというか、この間も国土交通大臣に会いに行きました。そしてもう今修善寺までずっと来れますね。そして修善寺から天城北までも計画どおりつくられています。それから天城を抜かないといけません。

これはまずどういうふうにするか、計画段階評価という手続きが要るんですが、これはまず下田から河津まできっちりやってからやっても間に合うのに、それも計画段階評価に入れますと。つまりはある意味で前倒し的に国交省は取り組んでくださっている。しかも私どもはこれは命の道だと。

ちょうど三陸沖のときに東北自動車道だとか4号線、そこからくしの歯のように下におりていった、三陸の海岸におりていった、そういう背骨に当たるのが伊豆縦貫になりますから、これをやらないで国交省としては失格ですよなんて偉そうなことを言うものですかから、最初はこいつばかじゃないかと思われた。そのうち本気だということになって、それをあちこちで言うものですかから、もうどんどん、どんどん予算はついておりますので、しかしなかなかこれは難工事も入っております。ですから今日言って明日というわけにはいきませんが、日本政府としてできる最高のスピードでやってくださっているということですね。

それからお医者様は、この西部、中部、東部で、西部には浜松医大があります。1つしかないんですね、大学が。大体卒業生が100人ちょっとです。ところが神奈川は400人です。あるいは愛知県でも400人です。

だけど、今は順天堂大学の病院がありますし、それからちょっとカタカナ語で恐縮ですけども、バーチャルリアリティのバーチャルってあるでしょう、現実でない。バーチャル・メディカル・カレッジ、バーチャルな医学校というのをつくったんですよ。

実は医学部をつくってくれと、医科大学をつくってくれというふうに言っても、お医者様が反対されるんですよ。医師会が反対する、文科省が許さない。あちこちにそういう要望があるんですけども、なかなか難しいということで、じゃどうしたらいいかなということで、日本各地で学ばれている医学生に奨学金をあげると、6年間。これは医学部というのは6年かかります。6年もらう以上は、6年の1.5倍、つまり9年間は静岡県の病院で働いてくれと、これが約束で差上げると。

それを平成19年に20人ぐらいから始めたんですよ。平成21年、私の代になりまして100人にあげました。今120人です。だから毎年100人以上の方たちがバーチャルメディカルに、その学長がだれかという、この間文化勲章をもらった、静岡県立大学の理事長です。

その人を学長にしているものですから応募が来るんですよ。ですからこのお医者様の問題も取り合いになっておりまして、なかなかすぐにはいきませんが、もう既にバーチャル・メディカル・カレッジの卒業生が出てきました。トータルで100人いると、卒業生がですね。そういう人たちが働きつつあるわけです、これから9年間働いてくださる。

それが毎年こういう卒業生が出てきますから、しかしそれは看護師も要りますし、介護士も要るし、そういう人たちもつukらないといかんということですね。ただ、もし医学部をつくとすれば、敷地を提供する、校舎をつくる。10年間ぐらいかかります、お医者さんになるのに。その間金くれ、金くれと言われるんですよ。これはもう奨学金で出して、ものすごく安上がりなんですよ。そして全部こっちに来てくれる。

大体25~26歳で卒業するでしょう。34~35歳になるじゃないですか、9年間ですから。結婚のしどころでしょう。ともかくそういう結婚適齢期の形で残る方たちがこれから出てくる。毎年100人前後出てくると、こういうわけです。ですから伊豆半島、特に東部地方全体がお医者さんが少ないことはよくわかっておりますけれども、今はそういう形ででき

る限りのことをしていると。

それからドクターヘリというのは、日本一の回数です。しかしながら夜間のドクターヘリですね。これは市長さんのおかげで、こちらのヘリポートは見つかったんですが、受け入れ先、夜間のヘリポートは騒音があると受け入れてくれないんですよ。自衛隊のいわゆる浜松の航空自衛隊のところまで頼みに行きましたけれども、それでもだめだと。どうしてもある騒音のレベルをクリアできなくて、夜間については今皆様方迷惑かけておりますけれども、とりあえずできる限りのことはしている。昼間のドクターヘリに関しましては日本一です。

そういうことで、いざというときにはこども病院であるとか、あるいは順天堂大学の病院であるとか、聖隷病院だとか、そういうところが使えるようにはなっております、子供が病気で不幸なことにならないようにやっておりますとだけしか申し上げられなくて残念ですけれども、以上でございます。ありがとうございました。

【発言者2】

私は海のことから質問なんですけれども、今後マリンスポーツについて、静岡県の方で何かお考えのことはありますか。

【川勝知事】

あります。海岸というのは、マリンスポーツがなかなかできないような形で、高潮に対してまちがやられないようにということで、コンクリート壁をずっとつくってきたのが長い間の日本における運輸省の方針だったんですね。

それをひっくり返して、海と親しまないと、ますます、ますます子供たちが臆病になるというか、スポーツもできなくなるということで、海に親しむ親水的なそうしたものをやってきた一番の最高のエリートが副知事の1人です。それをもうちゃんととってあるんですよ。

その人が最初に、私がまだ学者のころですけれども、彼のやったことに注目して、また彼も私の意見に賛成してくださって、マリンスポーツで一番簡単なのはビーチでバレーをやるとか、ビーチのスポーツですね。それでオリンピック選手、シドニーだとか何かで銀メダルとか取った人たちを先生にしてやるということで、そこから始めた人ですから。

ですからサーフィンはもちろん波乗りで有名ですけれども、砂浜を利用した、今はそれは何か国際的なスポーツになっているようなんですけれども、さまざまなそういうアスリートですね、マリンアスリートの知恵を入れながら、行政としては応援をしているということ

で、それぞれの砂浜とか海の特徴によってできるスポーツがあると思うんですが、ぜひ発言者2さんの方で御提言があるなら、県としては今国の最高のトップをうちのちゃんとスタッフにしておりますので、そういうことについての理解は最もあるというふうに思っています。ありがとうございます。

【発言者1】

知事、ちょっとお伺いしたいんですけども、先ほど発言者6さんの方から出ましたけれども、子供の学力アップというところにつきまして、何か考えられている方策がありますか。

【川勝知事】

学力というのはですね、伸びたり縮んだりするんですね。ですからある一定の時点で低いということ余り気にする必要はないというふうに思っています。

10歳や11歳や12歳の子供に何の責任もありません。

野球だって、監督にすごい監督を呼んできたら上がるじゃないですか。だから高校野球でさえ監督次第ですよ。プロ野球でさえ監督次第でしょう。今のなでしこのサッカーでさえ、監督次第です。

ですから、そういうプロですらそうなんですから、ましてや先生の言うことをしっかり聞いて、そのとおりにやっている子供たちにとって一番大きな責任は先生にあるので、ですから責任は学校じゃなくて個人名です。そしたら一気に成績が上がったわけです。先生がやり方を変えたからです。

ですから私は、先生は忙しいとおっしゃるので、先生は一学級40人のところを35人にしてくれと言われたので、平成28年度にするという約束で私は知事になったんですが、平成25年度にもうしてしまいました。3年前倒してやったんです。

そしたら今度はまた忙しい、忙しいとおっしゃるので、じゃどうしようかというので、みんなで、先ほどの発言者3さんなどが放課後児童クラブをやってくださっていると。いろんな人がいろんなことを教えることができるので、先生が算数や国語や理科、社会でちゃんと免許を取られているならば、それを教えてください。それ以外のことではほかのことでできますので、クラブで忙しいということであれば、そのクラブについては、こちらでだれかできる人を人材バンクに入れてやっていこうというような今方向に変えつつあって、先生をできる限り子供に時間をとれるように、今やっているということです。

ですから、ただ学力が落ちた、それはなるほど数字です。だけど、どうですかね、すぐ

上がるじゃないですか。また下がったりします。そんなに大したことじゃないでしょうと僕は思っているんですが、それを大したことがあるというふうに思い込みすぎると、1点2点を争う、文字通り偏差値の奴隷みたいになってくるので、もう少し大らかになった方がいいじゃないですか。

しかも国語だけじゃなくて、例えば走ってみてください。そうするとどの子が速いかということはみんなわかっているでしょう。ピアノに合わせて歌を歌うと、どの子が上手か皆わかっているじゃないですか。だから上手下手というのは、子供たち皆わかっていますよ。西伊豆の仁科小学校、見学に行きました。そしたら成績の一番悪い子が、ここ間違っただと言うんですよ。そしたら、これはこうした方がいいですということをお子さん同士でやっているわけです。できない子に対して、君がばかだとか、できないとかとやらないで、なぜできなかったのか、どうして間違っただのかということをお子さん同士で全部オープンにしてやっている授業を見て感心しましたね。

ですから私自身はいつ子供の能力が出てくるかというのは、それはわからないと。どういう能力を持っているかもわからないと。それを引き出すのに、国語だ、あるいは算数だということだけにとらわれている、それはおかしいと。ものすごく速く走る子と、算数がものすごくできる子と、どちらが偉いですか。どちらも偉いと。音楽でもものすごくきれいに歌う子と、理科が無茶苦茶できる子とどちらが偉いか。どちらも偉いと。

富士山に登り口がたくさんあるように、いろいろな立派な人間になっていく道があるというふうに思っております、あの学力テストは何のためにあるか。日本全体の学力を文科省がとらえるためにあるんですって。それに対してすべての小学生、中学生に強制的に受けさせるということなんです、それに数十億かけているんですよ。しかも結果を教えてくれない。

皆様方が町長さんの支持率がどれぐらいだというときに、すべての町民の選挙民の方にやらないですよ。300人ぐらい、あるいは100人ぐらいに電話したり、サンプル調査というのをやるわけです。これは内閣の支持率も何も皆一緒です。それでわかるんですよ。どこの新聞社がやっても、大体同じですね。これ全部サンプル調査です。それで十分なんです。そうするとほとんどお金かからないです。都道府県、北海道から沖縄まで、日本の学力を知りたいければ、それをやれば数億で済む。それを何十億とやっている。

ですからそれだったら、1億円あれば何人人を雇えますか。500万で十分に人は生きていきます。1,000万で2人でしょう、1億だったら20人じゃありませんか。それだけ人が来

ただけでも全然違うんですよ。

本当に子供のためにするにはどうしたらいいか、我々は自分で考えた方がいいと。自分たちの子供をどういうふうに学力を上げていくか。

先ほどの発言者4さんがおっしゃったような形で国語を教えるという方が、よほど子供にとって自分たちの言葉、自分も聞き書きをして、書いてごらんといったら、作文の能力も増えてきます。ですから学校だけが現場じゃない。テキストは私はこの地域にあると。地域の人が先生であり、地域のさまざまな産業や文化や、あるいはジオパークのように、自然それ自体がテキストといいますか教科書だというふうに考える時が来ているんじゃないというふうに思っているんです。学力についてはそういう考えを持っております。

【傍聴者1】

今日はどうしても川勝知事にアウトリガーカヌーというキーワードを応援してもらいたいと思って来ました。

私弓ヶ浜でコテージをやっているんですけども、最近アウトリガーカヌーでトップアスリートたちがキャンプを張っています。去年の日本の全日本チャンピオンだとか、モロカイ・ホエという世界最大レースで16位になった日本人トップの選手が、ずっとキャンプ張っています。

で、今その家族が、トップアスリートたちが弓ヶ浜に移住してきます。なぜかという、聞いたら、弓ヶ浜の南伊豆の海はハワイと一緒にだというんですよ。僕も伊豆漁港の組合員ですから海は知っていますけれども、ハワイと同じ海だというのは知りませんでした。そうすると、来年リオオリンピックのパラリンピックでアウトリガーカヌーが正式種目になりました。

多分、東京オリンピックも正式種目です。ひょっとするとこのままいくと、東京オリンピックの正式種目になるかもしれない。そうすると、もうやるところは南伊豆しかないんです。ぜひさっきの副知事さん、副知事さんを頭に立てて、サーフィンは下田、アウトリガーカヌーは南伊豆、自転車は修善寺という対策室をつくっていただきたい、いかがでしょうか。

【川勝知事】

それはもう弓ヶ浜、最高じゃないですか。今まで伊豆の方は観光地ですから、人が来るものだと思っているでしょう。けども、これからは首都圏の人が中心に来るとい

けではなくて、いわば世界の宝物ということになりますから、韓国の方、中国の方、台湾の方、東南アジアの方、そしてまた欧米の方たちがお越しになります。あるいはイスラム教徒の方、この人達は豚だとか油物、酒類とかこうしたものを嫌われるでしょう。

それを知るにはどうしたらいいかということ、相手を知るといことが大事で、そしてあそこよりこちらのどこがいいかということを経験で言うというふうにまですると、本当に強いですよ。ですから私はこれからの伊豆の人たちは、伊豆の道は世界に通じると、そして世界で最も美しい半島であるというふうに私は思っているんです。

これは例えば地中海というのはきれいなところだと言われます。イタリアにナポリというところがありまして、その少し離れたところにカプリ島というのがあります。ここは最も贅沢なところだ。カプリを知っている人がこちらに来て、カプリよりもはるかに伊豆半島の方がきれいだ。美しい磯の景色がたくさんあると。それを知っているから言えるんですね。ですから私は台湾でも韓国でも、そういうところに行かれて、知見を広めることが実は観光力を高めることになる。

このスポーツにつきましても、これはお金がかかるので、ツアーに参加するとか上手に節約をされながら、仲間と一緒に、また通訳も上手につけて見に行くというようなことをなされると、本当に力がついて、訴えというか、要請も説得力が出てくると思っております。

【傍聴者2】

伊豆半島ジオパークについてお伺いします。湊の傍聴者2と申します。お願いします。私はジオガイドの1期生です。伊豆半島が世界ジオパークに認定されるために、知事をはじめ、県として現在どのような対応をされているのでしょうか。たしか10日は南伊豆が認定のための審査でしたが、県としてどのように対応されているのかを教えていただけたらと思います。

【川勝知事】

どうもありがとうございました。ジオガイド第1号になっていただきまして、ありがとうございました。

そもそもジオパークというようにして伊豆半島が資格を持っているということをおっしゃったのは、静岡大学の先生ですね。その先生の意見を尊重して、伊豆半島をジオパークにするというふうに決めまして、そのためにはまず国内ジオパークの中に認定されなくちゃいけないということで、京都大学の前の前の総長にこちらに来ていただいて、見ていただくと、そうするとここは「なるほどすぐそうなる」ということで、専門家をまた呼

んでいただいて、国内ジオパークにたちどころになりました。

しかし、ここはたくさん市の町がありますね。賀茂地域だけでも1市5町あります。さらに伊東や熱海や、あるいは函南や伊豆、伊豆の国、沼津、あるいは長泉、清水も入りますからね、三島も入る。そうするともう本当にたくさん入るので、大きさとしては浜松よりも小さいんですね。あるいはほとんど静岡市と同じくらいの大きさです。しかしたくさん市の町が、10以上の市の町がうごめいている。

それがどういうふうにしたら1つになれるだろうかということで、伊豆半島をジオパークを通して1つ1つから1つにしていくというそういう試みもしております。そのためには、ジオパークの拠点をどこに置くか。そうすると一番便利なところでなくていけない。今までは伊東市に置いてあったんですが、今場所を探しているところです。

そして、このたび2人の審査員が来られました。それぞれマレーシア人と中国人です。それぞれ専門が違うんですね。私は数日前にお目にかかって、伊豆半島の魅力を話をしたわけですが、今度それを案内された方は静岡大学の先生でございました。ですからどういう報告が出てくるかわかりませんが、言ってみれば伊豆半島のジオパーク化に向けて、県としておおよそやることは全部やってきたと思っています。

ただ、今年の9月に決まるんですけど、通常1国1つなんです。そして北海道のアポイというところが第一候補で、去年アポイだけと思ったら、第二候補としてこちらの名前も出してくださったんですよ。けどこちらは第二候補です。けど一応候補に入ったんですよ。ということは、今年秋に、その第一候補だけにすると仮に決まったとしましょう。そうすると翌年は確実にうちが第一候補なんです。確実に、これは。ですから今年だめでも来年ということは間違いありません。しかし、今年のその決定をなす場所が日本なんです。ですからひょっとするとボーナスが来るかもしれない。

ただし、やはりこちらでも今日下田市長さんと南伊豆の町長さんが来られていますけれども、やはり行政として分かれていても、伊豆半島の住民として、来られる方たちはここからここが南伊豆だ、ここからは西伊豆に入るとか、そんなの関係ないでしょう。ですから一体感をつくるためのそういう試みが、実はジオガイドさんの存在だとも思っております。できる限り多くの方たちがジオガイドになっていただきたい。

老若男女関わりなく、全体で皆で伊豆半島学とでもいいますか、これを上げていくと。

ジオパークになること自体が、実は目的ではありません。ジオパークになるほどのところなんです。これをベースにして、伊豆半島の魅力をどのように世界にPRしていく

かということになると、もうこれはガイドブックは英語のものも出しました。しかし、韓国の人も来られる、中国の人も来られる、そうした中国でも簡単な漢字と難しい漢字と両方使いますから、その両方のガイドブックが要るとか、それから標識も全体として統一させなくちゃいけないとか、そうしたやることがたくさんありますので、そういう提言をガイドさんとしてやっていただきたいと。いろいろガイドしながら気づかれたことを教えていただくと。そして行政にそれを言っていただきたいと思います。

【傍聴者3】

私は下田市の白浜から来ました傍聴者3という者です。

私は下田市の白浜で50年近く農業をしております。夏はカボチャや、そしてキュウリ、ナス、そしてトマトをつくり、冬はブロッコリーやカリフラワー、そして大根、キャベツなどをつくりまして下田の市場に出荷して暮らしを立ててまいりました。

2011年の3月、東北で起きたあの東日本大震災で東京電力福島原子力発電所が、我々が経験したことの無いような過酷な事故を起こして、いまだに放射能に汚染され、そして10万人を超える人たちがふるさとを追われてさまよっているという状況です。放射能による汚染は、福島で起きた伊豆半島にも及びました。今回私たちが南海トラフの巨大地震の発生の恐れがある中で、一番私は気になるのは、この静岡県御前崎市浜岡に立地されている中部電力浜岡原発の再稼働の問題であります。

知事さん御承知のように、中部電力浜岡原発は、あの2011年の福島原発事故の直後、5月、当時の首相が中部電力に乗り込んで、この南海トラフの巨大地震発生の前に危険性があるということで、中止の要請をして今日に至っているものであります。しかし、昨年2月、中部電力は3号機、4号機のこの再稼働に向けてのいわゆる政府の規制委員会に対し、安全審査の申請を行い、着々とこの再稼働に向けて準備を進めていると思われま

す。私たちの住む伊豆半島は御前崎とほぼ同緯度に位置して、距離にして60kmから70km、間は駿河湾があるのみで、遮るものは1つもございません。浜岡で福島原発事故と同じような事故が起きた場合に、私たちの住むこの伊豆半島、優れた景観、自然、歴史、こういったものが壊滅的な放射能による汚染を避けられないと思います。そういう点につきまして、知事さんの中部電力の浜岡原発の再稼働に対してどのようなお考えをお持ちであるか、大変失礼ですがお伺いさせていただきます。以上でございます。

【川勝知事】

質問者3さん、どうもありがとうございました。質問者3さんがおっしゃるとおり、浜

岡原子力発電所がシビアアクシデントを起こしますと取り返しのつかないことになります。したがって、この浜岡原子力発電所の再稼働は今のところあり得ません。

そしてただ、簡単に永久停止だとか、廃炉だというふうに言って安全が確保できるものでもないんです。なぜか。そこには 9,000 体余りの使用中、使用済みの核燃料体があります。これは使用済みのものが 1 万體近くあるんですけれども、こうしたものはいわゆる解熱熱を出しているんですね。これを常に冷却し続けていないと、これは危ないのです。冷却し続けるというのはだれがするかというと、そこで働いている 3,000 人の方たちがしているわけです。その 3,000 人の方たちが、仮にやる気をなくしたらどうしますか。それは行かれたら、行かれなくても、原子力というのは巨大な設備です。ですからそのチェックというのは本当に難しい。

そしてやる気がなくなると、あの「もんじゅ」という高速増殖炉といいまして、1 万点以上の点検漏れがあって、そしてもうどうしようもない状況で、それこそ原子力規制委員会の方たちが「君たちはやる気があるのか、技術者としての魂はどこに行った」と、それは本当にやる気をなくさせるような政策をとっているからですね。

私どもの立地している浜岡原子力発電所は、原子力発電所の中に安全研究所というのをつくってもらいました。安全研究所をつくって、勝手に中部電力が安全の研究をせよと、本当にやっているかどうかかわからないので、安全の研究を公募にさせていただきました。そして今 1 億円を超す、3 年間続けてその安全にかかわる研究が出てきております。

ですから今のところ、浜岡原子力発電所は動くというよりも、原子力はいずれ必ず廃炉にしなくちゃなりません。40 年ほどたつと廃炉にしなくちゃいけませんし、浜岡には 5 つの原子炉がありますが、1 号機と 2 号機はもう廃炉が決まっております。それも全部オープンにしてやっていますから、何と驚いたことに、あの I A E A という国際原子力機関というのがありますが、そこが共同研究をさせてくれと。あるいは日本の電力会社がつくっている中央電力研究所というのがあるんですが、それに匹敵するものすごい大きい組織がアメリカにありますが、そのアメリカの組織も同時に浜岡原子力発電所で共同研究をさせてくれと。つまり秘密のものを一切持たないで、何もかも全部オープンにするというふうになっているんですよ。

ですから、再稼働というふうに、安全審査をお願いすると、安全は審査をしてもらわないと、安全かどうか、安全でないということになれば、ものすごい問題ですよ。ですからすべて拒まないで。安全審査するからすぐ再稼働だというようなことはない。そもそも 1

万體近くあるんですが、仮に動かしたとします。そうすると 300 体くらいの新しい燃料を入れなくちゃいけない。あと残り 1,000 体もありません、余裕が。いわゆる燃料プールという使用済みのものを入れる場所がないんですよ。その後どうするんですか。六ヶ所村というところに持っていくと。もう向こうは工事が止まっていますよ。持って行き場所がないです。だから動かしようがないんです。

ですから皆様方もスローガンのように、廃炉だ、永久停止だ、あるいは再稼働反対だという前に、浜岡原子力発電所がどういう状態になっているのかと。ですから私はその今の状態について追っておりますから、動かせるような状況には全くないと。安全一本でやっている。

そして5月6日の日に午後7時過ぎに元首相が、3号機、4号機、5号機、3号機は止まっていたんですけども、4号機も5号機も止めるべしというふうに言われて以来止まっていますが、止まっているからといって安全でないということです。再稼働ができるような状況にもないということです。しかし安全についての技術を磨いていると、知見を入れていると。

そういう意味で、そしてまた関西電力だとか、あるいは九州電力というのは一番多いときに原子力に依存している電力の量が5割でした。ところが静岡県は1割なんです。9つの電力会社が原発を持っていますが、その中で一番低いのが静岡県です。1号機について大体100万キロワット、平均すると。太陽光で100万キロワット近くきています。しかも、この4年間、全く動かさないで済んでいるでしょう。ですから浜岡原子力発電所がなければ中部電力の地域の電気が賄えないということはないと。

ただし、ここは東電の管轄でございますから、東電が電気が足りないと中部電力に供給してもらわないといけません。これは清水というところと佐久間というところと北の上田で周波数が違いますので、その周波数を今まで120万キロワット分だったのを、今それより100万キロワットさらに多くして提供できるように今してもらっているんです。それからまた小水力発電とか、地熱発電とか、さまざまな形で自分たちのエネルギーは自分たちで賄っていこうというそういう動きもしております。それは攻めた方がいいと思います、そのいわゆる再生エネルギーというやつを。

浜岡原子力発電所については、安全文化、安全技術のメッカに今なりつつあるというのが実態ですから。ちなみに、例えば東電と新潟県の関係はどうですか。チャンバラしているでしょう。けんかしていますわね。福島の前知事と東電はけんかしていたでしょう。あ

るいは九州電力でも、鹿児島県民との間でいろいろ問題がありますね。

　　だけど、私どものところは信頼関係があるんですよ。ということは全部教えてくれるということです。だから中部電力が何しているかということを知っている原子力安全委員会というのがあります。今廃炉の研究のトップをされている先生だとか、そういう方たちが入っていただいて、そこで皆さんの前で議論していただいているんですよ。中部電力、ここどうなっているんですか、あんなっているんですかということを知。ですからそういうところまでもしニュースを追っていただきますと、到底動かすというふうなことは、今の視野には入れる必要はないと思います。